

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第42集 (2010年度) 2011年3月発行：345-352

一 学術団体に対する若手研究者の意識調査と分析

北 垣 郁 雄

一学術団体に対する若手研究者の意識調査と分析

北 垣 郁 雄*

1. はじめに

世界トップレベルに向けた大学院教育の改革が求められている。教育と研究の関係、コースワーク等のカリキュラム、学生の質等さまざまな観点から議論される。グローバル化・国際化が進む今日、大学院教育の改革が進まないと、結果的に社会的ニーズに沿わない修了生を生み出したり海外からの留学生が減少することになる。

大学改革のビジョンを求めたりその具体化を図るために、学生、教員をはじめ若手研究者等ステークホルダーの意見を求めることがある。例えば、学生が大学に対してどのようなイメージや要望を抱いているかの意識調査を行うことにより、カリキュラムを再考するための統計的基礎データを得ることができる。またそのような研究も多い。

本研究ノートでは、若手研究者の意識調査に基づいて、大学院教育改革の示唆を得る。そこでは、一学術団体に対する意識をアンケートで調査し、その傾向をつかむことを目的とする。

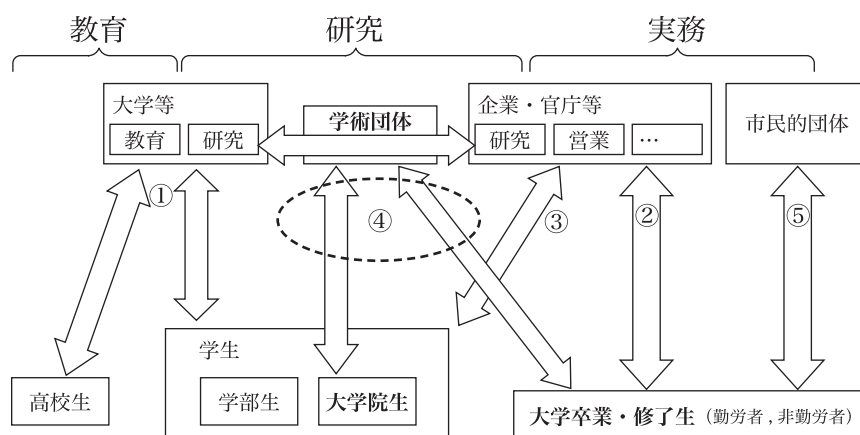


図1 大学・大学院改革と意識調査対象

* 広島大学高等教育研究開発センター教授

2. 一学術団体に関する意識調査

2.1 位置づけ

最初にこの意識調査の位置づけを明確にしておきたい。図1は、これまでの研究において大学に関する意識調査をどの対象に対して行ってきたかの概略を示したものである。

- ① 大学の教育，研究等諸活動に関して，直接学部生や大学院生に意見を求めることは，めずらしくない（武内，2008；金子，2008）。特に，部外者で大学に大きな興味を抱く対象として，高校生を選び，アンケートを求めることもある（濱名，2000）。
- ② 大学・大学院を卒業・修了し，企業等に就職した人たちに学生のころを振り返ってもらい，間接的に大学教育の在り方を考えるという方法もある（濱中，2009）。
- ③ 長年企業に勤める管理職が，新入社員の様子をみて大学教育をどう考えるか，という手順で大学の在り方を考えるという方法もある。
- ④ 学術団体に所属する若手研究者や大学院生が，当該学術団体についてどのような意識を持っているかを調査し，その結果から大学の在り方を考えることもできる。
- ⑤ 市民的団体に所属する勤労者／非勤労者が，大学の教育上の問題を意識することもあるだろう（新田ほか，2005）。

以上のカテゴリーの中で，本研究ノートで扱う意識調査は，④に相当する。学術団体に所属する若手研究者は，長きにわたって本務に近い形でさまざまな関係をもつはずである。当然のことながら，研究者は当該学術団体との関係には関心が高い。そこで，若手研究者に対して学術団体に関する意識調査を企画したわけである。

2.2 アンケートの制作

意識調査は，国内学会のほか国際学会について，主に以下の観点で構成した。アンダーライン部は後述の表1内に示す文字列である。

1. (国内学会)

- a. 情報収集手段としてどの程度利用しているか。
 1. ほとんど利用していない
 2. たまにしか利用していない
 3. ときどき利用する
 4. 大いに利用している
- b. 情報発信手段としてどの程度利用しているか。
 1. ほとんど利用していない
 2. たまにしか利用していない

3. ときどき利用する
 4. 大いに利用している
- c1. 人的コミュニケーションの場という側面をどの程度持っているか。
1. ほとんど持っていない
 2. 多少持っている
 3. 大いに持っている
- c2. 今後, 人的コミュニケーションの場として利用したいと思っているか。
1. そうは思っていない
 2. その場の成り行きにまかせるだけ
 3. そう思っている
- d1. 当該学術団体の運営にどの程度参加していると感じているか。
1. ほとんど参加していない
 2. たまに参加することがある
 3. よく参加する
- d2. 将来, 当該学術団体の運営にどの程度参加したいと思っているか。
1. あまり参加したくない
 2. たまに参加する程度ならよい
 3. よく参加したい
- d3. 将来, 当該学術団体の中でどの程度「偉く」なりたいと思っているか。
1. 特段「偉く」なりたいとは思っていない
 2. ある程度のレベルまでなら「偉く」なりたい
 3. なるべく「偉く」なりたい
 4. 「偉く」なりたいという野心にあふれている
-
- ## 2. (国際学会・会議)
- a. 外国での国際学会等にどの程度よく参加しているか。
1. 参加していない
 2. たまに参加する
 3. 機会があればよく参加する
- b1. ここ数年, 外国での国際学会等の運営にどの程度参加していると感じているか。
1. 参加していない
 2. たまに参加することがある
 3. 機会があればよく参加する
- b2. 将来, 外国での国際学会等の運営にどの程度参加したいと思っているか。
1. 参加したくない
 2. たまに参加する程度ならよい

3. 機会があれば参加したい
- b3. 将来、外国での国際学会等でどの程度「偉く」なりたいと思っているか。
1. 特段「偉く」なりたいとは思っていない
 2. ある程度のレベルまでなら「偉く」なりたいと思っている
 3. なるべく「偉く」なりたい
 4. 「偉く」なりたいという野心にあふれている

上記アンケート1に記述した「国内学会」としては、各アンケート回答者が所属する文系学会の中で最も自身の研究に近いと思うものを一つだけ思い浮かべてもらう、という方法を採用した。

このアンケートは、我が国の一文系学会の2006年度会員名簿の中から232名に平成22年7月下旬に発送した。18回答を回収したが、平成22年8月1日現在で40歳未満の会員に限定したため、通常の意味での回収率は不明である。

2.3 アンケートの集計と分析

集計結果を表1に示す。各項目の選択番号の平均と標準偏差、男性平均と女性平均の差等を掲げている。回答者のうち、3分の2が男性である。

表1 集計結果

学術団体	項目	(a) 男性		(b) 女性		(c) $a_m - a_f$	(d) (c)の序列
		平均 a_m	標準偏差	平均 a_f	標準偏差		
国内学術団体	a. 情報収集手段	3.42	0.64	3.50	0.50	-0.08	10
	b. 情報発信手段	2.42	1.26	3.50	0.50	-1.08	1
	c1. 人的コミュニケーション	2.50	0.50	2.17	0.69	0.33	5
	c2. 今後、人的コミュニケーション	2.67	0.62	2.67	0.47	0.00	11
	d1. 当該学術団体の運営	1.33	0.62	1.17	0.37	0.17	7
	d2. 将来、当該学術団体の運営	2.00	0.58	2.17	0.37	-0.17	7
	d3. 将来、当該学術団体の中でどの程度「偉く」	1.25	0.60	1.80	1.13	-0.55	3
外国での国際学会等	a. 外国での国際学会等にどの程度よく参加	1.42	0.64	1.00	0.00	0.42	4
	b1. ここ数年、外国での国際学会等の運営にどの程度参加	1.25	0.60	1.00	0.00	0.25	6
	b2. 将来、外国での国際学会等の運営にどの程度参加	1.91	0.79	2.00	0.63	-0.09	9
	b3. 将来、外国での国際学会等でどの程度「偉く」	1.55	0.96	2.20	0.84	-0.65	2

この結果から、男女差が最も大きい項目が、「国内学術団体」における「b. 情報発信手段」で、2番目が「外国での国際学会等」における「b3. 将来、当該学術団体の中でどの程度『偉く』」であ

ることなどがわかる。「国内」の項目 b の結果から、女性は男性より活発に国内学会の研究会や学術誌等を通して学術活動を行っていることが窺える。また、「外国」の項目 b3 の結果から、女性は男性よりも、将来の野心にあふれていると言えそうである。この点は、「国内」に関しても、項目 d3 の結果から明らかである。一方、「外国」の項目 a は、男性のほうが値が高く、現状では男性の方が海外によく出ることがわかる。女性の回答からは、子育てや経済的理由で外国に出にくいなどの意見がある。

以上の結果から、男性より女性のほうが、成果発表に積極的であるとともに、将来的野心の度合いが高いと言えそうである。

3. おわりに

本研究の意識調査の結果から、回答者数は多いとはいええないものの、学術団体に対する現況や意識に性差があることが示唆された。これを一つの仮説として、さらに詳細な研究を進めることが望まれる。

研究者養成は、大学院教育の大きな一目標であるが、本研究ノートの結果、(1) 性差を意識した教育研究指導、(2) 特に男性に対しての、性差の実態を明示しながらの教育研究指導、などの検討が望まれる。

本研究は、大学院改革に関する戦略的研究プロジェクトの一環として進めたものである。日頃よりご助言をいただいている関係各位に感謝の意を表します。

【参考文献】

武内清 (2008) 「学生文化の実態と大学教育」『高等教育研究』第11集, 7-24頁。

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター (2008) 『全国大学生調査第1次報告書』

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター。

新田孝彦・蔵田伸雄・石原孝二 (編) (2005) 『科学技術倫理を学ぶ人のために』世界思想社。

濱名篤 (2000) 「学生の教育期待の変容と大学評価」『高等教育研究』, 第3集, 125-148頁。

濱中淳子 (2009) 『大学院改革の社会学』東洋館出版社。

An Awareness Survey of Junior Researchers in an Academic Society and Analysis of the Results

Ikuo KITAGAKI*

Renovation of the graduate school in order to achieve a high international standard is a required objective. This has been discussed from various viewpoints: the relation of education and research, the coursework curriculum, student quality, and so on. Unless the renovation is appropriate to the era of globalization and internationalization, it will fail, producing graduates who do not fit the social needs, decreasing the number of the student from abroad, and other negative results.

In order to generate a vision of university renovation, it is useful to ask students, teachers, junior researchers as stake-holders of their awareness. For instance, this could provide statistical data for considering the curriculum by conducting a survey on what vision or what opinions they have. Actually many studies dealing with such surveys exist.

This paper suggests renovation of the graduate school based upon the results of an awareness survey of junior researchers in an academic society and identifies the overall trends.

* Professor, R.I.H.E., Hiroshima University